
ダブルストーリー

uniuni

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダブルストーリー

【Nコード】

N2472Z

【作者名】

uniani

【あらすじ】

なぜ俺と恋人の晴香がここにいてかわからない。
突然現れた非日常。

魔物とか魔獣とかがひしめく、死と隣り合わせのこの世界で生きていくしかないのか。
頼りはゲームみたいな能力のみ。

生きている意味とは何だろう。

答えのない答えを探したい。見つけたい。

最初の最初（前書き）

初めて書きます。

正直うまく書けている自信はありません。

だけど、自分が読んでみたいと思えるようなものが書けたら、いい
と思っています。

少しだけ、お付き合いください。

最初の最初

くくく

「右!!」

不意に鋭い突風が木々を薙ぎ倒しながら向かってきた。

「メガエアロ!!」

パートナーの晴香がさかさずスキルを使い、木々をなぎ倒しながらこちらに向かって来る魔法を相殺する。

「目標が来たよ。数は3。くるよ。」

「了解。右からいくぞ。」

俺は腰にある剣を引き抜き、剣にスキルを這わせながら敵に向かう。

「ガイアソード!」

今回の目標であるハイゴブリンは知能も高く、連携もしてくる。

俺の前には大きめの盾とナイフを持ったハイゴブリンが立ちふさがり、後ろでブロードソードを持ったハイゴブリンが隙を窺っている。しかし、一番警戒しなければならぬのが、後方で杖を片手によくわからない言語をぶつぶつ呟いているハイゴブリンだ。

通称マジックゴブリンだ。さっきの突風もおそらくこいつのエアロ系統のスキルだろう。

このマジックゴブリンは、かなり高いレベルのスキルを使えるのが

特徴だろう。

ハイゴブリンの盗伐の難易度が高いのは、連携力とこのマジックゴブリンの能力のせいである。

俺は盾を持ったハイゴブリンの側面からガイアソードのおかげで切れ味の上だった剣で切りつける。

ブチュツという鈍い音が鳴り、盾を持ったハイゴブリンを盾ごとあっさり斜めから両断する。

俺はガイアソードの効果が切れないうちにブロードソードを持ったハイゴブリンに向かい、足を切り飛ばし体勢を崩した後に首を刎ねる。

「フアイヤ!!」

後方から晴香のスキルを叫ぶ声が聞こえ、火の玉がマジックゴブリンを通過して上半身が灰になる。

うめき声も上げられずに灰になったハイゴブリンを横目に、俺は大きく息を吐き出す。

今回もまた生き残れた。この感情はいつも強く、一番強く自分の中に残る気がする。

日本の群馬に生まれて山の中で育ち、現代人よりも自然に親しみを感じているが、平和な世の中でこんな生き死にを左右する事態はあり得ない。想像つくわけがない。

こんな殺伐とした生活が始まって一ヶ月。

生々しくもあり現実感の無いこのバカらしい世界に俺と晴香がいる理由を説明するには、一ヶ月前に遡る必要がある。

~~~~~

一話　く普通こそが貴重　く（前書き）

よく物事には正解がないというけど、もし小説の書き方があるなら教えてほしい。

そんな今日この頃。

基本も何もあつたもんじゃないな。これで小説として成り立っているか不安。

ですが、懸命に書かせていただきます。

## 一話　く普通こそが貴重く

「そこ右じゃない？」

「さっき通ったじゃん。レアじゃなかったし。」

俺と恋人の晴香はパソコンに向かっていて、少し前に流行ったネットゲームをやっている俺に、晴香がちゃちゃをいれる。

最近は部屋でこんなやり取りをしていることが多い気がする。

もちろん普通のデートなんかもするが、晴香は俺のアパート入り浸りで、大学の講義や友達と遊ぶ時以外の時間は俺の部屋にすることが多い。

こうやって俺がネットゲームをしている姿を晴香はよく目にしているし、ゲームを見ているのが好きなようで、ネットゲームをしているときによく近く（近くというか膝の上）で座って見ている。

そのせいか、かなり内容に詳しい。ステージのレアな敵の居場所とか武器のつくり方とか、知識がなかなかコアになってきた。

それにしても俺がこのネットゲーム、「ストレートストーリー」をやり始めて早三年が過ぎた。

大学の入学当時、初めてできた友達に薦められて始めたこのゲームは、今までしてきた家庭用ゲームとは違い友達と一緒にでき、なおかつゲーム内で友達ができるという俺にとっては革命的なゲームであり、俺がハマるのにはそんなに時間はかからなかった。

このゲームにハマって、それからの俺の行動は自分でもかなり早かったと思う。



中学の時の友達に頼み、快適にゲームができる性能のパソコンを組んでもらい、経験値の多く入るアイテムや強い武器をネットマネーで買いあさり（まあ、常識の範囲内ではあるが）、どんどん熱中していった。

まあ、最近は更新のマンネリ化が進み内容があまり面白く思えなくなってきた。

主キヤラクタは常にカスタムさせているが、最近ではいろいろな職業のサブキヤラクタを作って楽しんでいるような状態だ。

晴香の頼みで女のサブキヤラクタもいくつか作ったし、正直遊びつくしている感が強い。

今も晴香のお気に入りの女のサブキヤラクタでストーリーを進めていて、いまボスを倒したことによりレベルが上がった。

晴香がいる時は女のサブキヤラクタでゲームをすることが多く、入り浸っている今では男のサブキヤラクタより女のサブキヤラクタの方がレベルも高くなり、晴香もご満悦みたいだ。

「ねえ、もう一時だよ。そろそろ寝ようよ。」

「もうそんな時間か。明日は横浜に遊びに行くし、そろそろ寝なきゃか」

「そうだよ。久々に遊びに行くんだし、ゆっくり寝て明日は楽しみなきゃね。」

「じゃあ寝るか。布団剥くなよ。」

「そんなに寝相悪くないもんね。おやすみ。」

そんなたわいもない会話をして、俺たちは寝た。

そう。

確かに俺の部屋の俺のシングルベッドで俺と晴香は寝たのだ。  
これが俺達の見た最後の現実だった。

## 二話　く消えた当たり前く

「んん。ん？おかしいな。ベッドに陽があたることなんて・・・え、どこ。」

顔に眩しい陽を浴びて起きた俺は、わけがわからなかった。  
理由は簡単。部屋に一切見覚えがなかったからだ。

木目の鮮やかな木造の部屋で窓が一つ。  
ベッドとテーブル、椅子以外には何もなく、物もテーブルに林檎と梨が入ったバスケットがあるのみ。

唯一、見覚えがあるのは同じ布団で寝ている晴香だけである。

「おい。おい晴香。」

「なにい。もう出かける時間？」

「違う違う。マジちょっと起きろって。」

「うーん。わかったよう。おは・・・。ここどこ？」

「わかんね。俺もさっき起きたとこ。」

「・・・誘拐とか拉致じゃないよね？でも縛られたりしてないしなあ。」

「うーん。まあ、とりあえず落ち着いて状況を確認してみるか。」

「そうするしかないかな。ん？このメニューってなに？」

「メニュー？なにそれ？」

「あそこの……。あれ動いた。なんか右上にずっと書いてあるんだよね。」

「え？あ、ホントだ。なんだこれ。メニュー。ってうお！！」

「どうしたの？！え？」

「なんだこれ。」

俺の目の前にはノート大くらいの画面らしきものが出現していた。まるでタッチパネル式のパソコンの画面で見るとようなもののようで、突然目の前に出てきた。

薄く淡い光で包まれているそれは側面から見たらものすごく薄く、まるで投射機で白い布に映像を写したかのような様子だ。

そこには「アイテム」「ステータス」「スキル」「スキルノート」「錬成」といった項目があり、右上には俺の名前である「仁」と書いてある。

「なんかメニューっていったら出たぞ！」

「メニュー。あ。ホントだ！！私も出た！！」

とりあえずためしにタッチパネルの要領で「ステータス」を押してみるか。

（（

職業：剣聖 L150、槍使い L74、魔法剣士 L60、忍者 L58、  
聖拳士 L51

合計L：393

SP：393 / 393

HP：10 MP：10

A：10 D：11

MA：10 MD：10

武器：なし

防具：スウェット

}}

と出てきた。・・・なにこれ。

「なにかのゲーム？」

画面を見た晴香がそういうのも無理はない。正直俺もそう思った。

「防具がスウェットってことは俺のことか？ってかステータス！レベルの割に低くないか？10って。」

「うーん。私も出してみるね。」

}}

職業：魔道士L111、神官L83、狩人L102

合計L：296

SP：296 / 296

HP：10 MP：10

A：10 D：11

MA：10 MD：10

武器：なし

防具：パジャマ

}}

「レベルは違うけど、ステータス一緒だね。」

「同じだな。どういうことだ？」

「うーん、何でだろうね。とりあえず他のも見ってみる？」

「そうだな。とりあえずスキルを・何にもかいてないな。」

「私もだ。何もないね。」

「ほかのも見てみよう。」

アイテムもお互いにもないし、練成にも何も書いていなかった。

ただ、スキルノートには職業項目があり、試しに仁の項目の「剣聖」を選択すると「剣技L1」や「身体強化L1」などの項目がありその隣には「必要SP1」などのことが示されていた。

試しに仁の項目の剣技L1を選択すると文字が金色に輝いた。

どうやら、SPを消費してスキルを取得することができるみたいだ。

「てかさ、この項目ストレートストーリーのスキルプレートに似てない？」

確かに似ている。「剣聖」とか「魔法剣士」とか、職業に書かれているやつは全てストレートストーリーの職業と符合するし、剣技L1って剣士の初期のスキルにあった気がする。

でも、ストレートストーリーは一人のキャラに一つの職業だった。スキルノートを見るに、俺も晴香も複数の職業を持っているみたいである。

「なんか似ているよな。そっちのスキルノートは、どう？」

「ファイヤとかアイスとか色々あるよ。ファイヤ押したらメガファイヤっていう項目できたし。なにこれ。ていうか、ストレートストーリーまんまじゃない？」

「だよな。剣技L1押したら剣技L2出てきたし。スキルプレートまんまだよな。」

「ごめん、混乱してきた。つまり私たちは視界の右上にメニューって書いてあって、メニューって言ったらタッチパネルらしきものできて、それを開いたら「ストレートストーリー」そのまんまなスキルノートという項目と同じ職業が書いてあったと。あってるよね？」

「たぶん。合ってるはず。てかわけわからん。起きたら知らない所にいるし、変なタッチパネルみたいなのが出てくるし。なんだよこれ。」

「人生でこんなにわけがわからないの初めて。こんなに落ち着いている自分が逆にびっくりだよ。」

「ていうか、メニューの話になって話が切れていたけど、まずここどこ？」

「ううん。どこだろ？」

メニューを閉じ（メニュー。といったら閉じた）最初の疑問に戻る。しかしながら、周りを見てもさっき見た殺風景な部屋の様子しかなく、よくわからないよな。

「窓から見た感じ外は森みたいだな。他に窓から見てわかることはないなあ。」

「やあ、起きたのかい。僕はベン。昨日はもう寝ていたみたいだから僕も勝手に隣のベッドで寝させてもらったよ。それにしてもいいな」。僕もパートナーが欲しいよ。一人旅は寂しいからね。」

金髪のひよろひよろした男がドアから入ってきて、いきなりそう告げた。

俺と晴香はいきなりのことにフリーズし、俺より先に復活した晴香が恥ずかしげに叫んだ。

「えええ？！あなた誰よ？！寝させてもらったって、勝手に隣で寝るとかダメでしょ！！」

「ん？一声かけずに寝たのは申し訳ないけどさ。ここは旅人用に派遣会社が建てた小屋だから、宿泊は自由でしょ？そんなに怒らなくてもいいんじゃない？」

「旅人用に？派遣会社？」

「そうだよ。君たちも何かの依頼でここに来たんだろ？・・ていうか君たち荷物は？武器も持たずに何故こんなところに？」

ベンと名乗った金髪君は、訝しげな表情でそう聞いてきたが、俺達はそれどころではない。

「依頼？武器？・・ベンさんでいいのかな？まず教えて欲しいことがあるんだけど、ここどこ？」



「へ？ここどこって変な質問するね。ここはオイル領のイルドの森だろ？何いってんの？」

「（知らない地名だ。）そ、そうだったね。まだ少し寝ぼけていたようだよ。」

「変な人だな。まあいいや。僕はもう出るから。またいつか。」

そういつてベンさん（年齢的に君か？）は、肩から掛けられる位の大きさのカバンと剣を持ち、さっさと小屋から出て行った。・・・  
って剣？？

「・・・なあ晴香。彼、剣持ってたよな？」

「・・・うん。」

「・・・銃刀法違反だよな。」

「・・・うん。」

マジでこれはどういうことだろう。しかも彼は俺達が武器を持っていないことに驚いていた。

てことは外には危険があるということか？・・・えええ？？！！

「こりゃまいった。迂闊に外に出れなくなつたな。」

「え？なんで？」

「さっきの彼の言動的にいつて、外には武器を持たないと危険な何

かがあるみたいだ。くそう。彼からもつと情報が得られれば良かったんだが。」

「え？え？なにそれ？どういうこと？え？」

「とりあえず落ち着け。晴香。大丈夫だから。」

一体何が大丈夫なのか自分でもさっぱりだが、晴香が混乱しては何かと困る。

とりあえず落ち着くのを待つか。

「大丈夫？そう、大丈夫だね。ありがとう。」

「おう。じゃあまあ、今わかっていることをひとまず確認しよう。」

今わかっていることは、ここはオイル領のイルドの森ということろで外は武器がないと危ない。

地名からいってここは多分日本ではないだろう。

あと、この小屋は派遣会社というところが建てたらしい。

メニューというとゲームのウィンドウみたいなものが現れる。

メニューにはいろいろな項目がある。

ということくらいだろう。

「うーん。だとしたら今調べられるのはメニュー位かな？他のは調べようがないよね。」

「そうだな。メニュー。・・・お！なんかステータスが上がってる！」

「え！・・・ホントだ。全体的に上がってるね！なんでだろう？」

「・・・多分スキルノートの剣術L1を取ったからだ。次に出た剣術L2を取ったらまた上がったから間違いない。・・・晴香。これはホントにバカみたいな想像かもしれないけど、ここはゲームの中かゲームみたいな場所なんじゃないかな？」

正直今のところの状況的にはその可能性は低くない。

普通に剣を持っている人。

メニューなんていう画面。

地名。

さっき会ったベンさんの言動。

正直ドッキリとかじゃない限り十中八九この推測は合っているだろう。

「・・・やっぱり今のところはその可能性が高いかもね。」

晴香もおっとりしているがバカではない。

現状をみてその可能性が高いのはわかったようだ。

「とりあえず。今のところはスキルを取ってステータスを上げたい方が無難だな。このステータスが本当に身体能力を上げてくれることを祈ろう。」

「・・・仁。この世界は私たちの知らない世界で間違いないみたいだよ。」

「はあ？晴香何言って・・・。それなに？」

「ファイヤだつてさ。さっき取ったスキル。言ってみたら出たんだ。」

・正直これが一番驚いたかもしれない。  
晴香の右手の上には火の玉が浮いていた。

赤く燃える火の中に青い部分があり、明らかにガスコンロとかでみる『火』そのものみたいだ。

「・・・晴香。それ熱くないの？」

「不思議と熱くないのよね。てかこれどうしよう。消し方わからないんだけど。」

「マジか！うーん。とりあえず外に投げるのが無難か？晴香できるか？」

「やってみるね。」

そんなかわいく『やってみるね。』とか言ってるけどそれ威力未知数なんだからそんな軽くいうん<sup>どころ</sup>・・・この威力あり得なくね？半径2M位のクレーターできたけどあり得なくね？

「・・・ははあ。ごめん。こんな威力出るなんて思わなくて・・・。  
あのお、本当にごめんね？」

「・・・オツケエエイ。とりあえず現実逃避は後にしよう。何この威力。あははは。とりあえず初期ステータスでこの威力なら自衛には問題ないはず。ってか、この威力で魔法使って生き残れないなら俺達は生きていけないから、大丈夫。あはははは。」

「・・・お願い仁。壊れないで。マジお願い。とりあえず武器がない以上、魔法が私たちの生命線だよな。どんな敵が出るかわからないけど、この威力ならきつと生き残れるはずだよな。」

「・・・ホントに日本じゃないんだな。戦争のない日本に生まれた俺達が魔法とか。あはははは。こんな皮肉はないよな。あはははは。」

「仁、戻ってきて。ホントに勝手にスキル使ってごめんなさい。大丈夫？？」

大丈夫なわけあるかああああ！！  
・・・はあ、どうするか。

### 三話　く生きる術く

とりあえずメニューをいじってわかったことがある。

基本的には「ストレートストーリー」のスキルプレートとメニューのスキルノートは同じものである。

しかしながらステータスの面でいろいろ違う点もある。

ステータスを上昇させる効果のスキルは名前の最後に「技」が付くスキルであることが分かり、基本的に最後に「技」が付く名前のスキル（剣技や槍技など）のステータス上昇効果は重複しないが、複数職を持っているため例外的に重複してステータスを上昇させるスキルがあることがわかった。

またその上昇値はその職のレベルに対応しているようだ。

分類として「剣技、槍技などの直接攻撃することを目的とした物理技系」、「魔技」、「聖技」の三種類に技系は分けることができ、その三種類はステータス上昇が重複することが判明した。

このことが分かったおかげでステータスは最初と比べるとかなり値が上昇した。

また、これによってSPの無駄使いが無くなり、攻撃スキルや回復スキルなど効率よくスキルを取ることができることとなった。

幸いにもファイヤなどの詠唱するタイプのスキルは、二人とも自分の職にある分は取得することができた。

武器のない俺達にとっては生命線となる魔法系スキル。

これができるだけ取ることができたのは本当に助かるし、生存率が上がるだろう。

というかものすごく便利な項目があった。

それは「錬成」という項目だ。

その項目には自分の所持している物が表示されており、メインやサブなどの選択画面によってその物を選択すると錬成することにより新たに作ることができる物が表示される。

たとえば、俺達がさっきまで寝ていたベッドのかけ布団と俺が着ているスウェットを選択したら「布のジャケット」（必要MP10）、「厚手の服」（必要MP5）などの項目が出た。

どうも「布のジャケット」の方が「厚手の服」より必要MPが多いことから上位の装備品らしい。

布のジャケットを選択すると今度は「布のジャケット+1」（必要MP20）、「布のジャケット+2」（必要MP30）、などの項目が出てきて、どうもMPをかければかけるほど上位の装備品になるようだ。

正直、今俺達が着ているスウェットとパジャマという薄着では寒い。ホント寒い。

小屋の中でも寒いのだから外に出ることなんかマジで無理！！な状況である。

とりあえず、俺のスウェットはかけ布団と合わせて「布のジャケット+10」（必要MP110）を作ることにした。

ピカッとした光とともに右手に持ったかけ布団と着ているスウェットが消えて、俺はそれなりに暖かそうな服一式を着ていた。

さっきまで着ていたスウェットと違い、ぴちつとした茶色のズボンに白いシャツ、その上にズボンと同じ茶色で布地のジャケット。ちよっとオシャレでいい感じである。

「仁いいなあ。私もなんかかわいいの欲しいなあ。」

「じゃあ、晴香も服錬成しなよ。ってかしなさい。寒いだろうし、

何よりその格好はアカン。」

・・・正直言つて晴香は結構かわいい。  
なぜこんなかわいい子が俺と付き合ってくれたのか全然わからないくらいである。

そんな晴香のパジャマ姿は外を歩くには少々セクシー過ぎである。

「そうかなあ。それじゃあ、私は、枕と毛布貰うね。」

晴香は錬成にパジャマを使わないみたいだ。

枕と毛布が光り輝き、光がなくなつたときには厚手の布とかが晴香の腕の中にあつた。

「布のローブ＋１１だつて。色も赤くてかわいいし、いい感じだね。」

「ああ。他に錬成するものは・・・ん？これは。」

果物の入ったバスケットの中にはステーキを食べるときに使うようなナイフが置かれていた。

おそらく皮を剥くために置かれていたのだろう。

「これで武器作れないかなあ。」

「できそうだけど、なにと合わせるの？」

それが問題だよなあ。

ん？

・・・これは灯台もと暗しだ。



「もう布団とかも勝手に使ってるし、テーブルとか使ったらダメかな？」

「いいんじゃない。やっちゃえ。」

オツケイツ。

ナイフとテーブルと。

これで行けるのは「木刀」（消費MP5）「ショートソード」（消費MP10）「槍」（消費MP10）か、残りMPは97。

さつきは96だったから1回復したみたいだ。

これでMPは時間が経つにつれて回復することもわかったし、後は武器をどれにするかだよな。

剣聖の剣技L10を取ったから槍は論外。

多分個体としてはショートソードの方が強いけど、+補正観点からしたら木刀が+18、ショートソードが+8と木刀の方がかなり高い。

この補正がどうかかわるかが問題だ。

・・・まあ、正直日光とか行ったときに10000円の木刀とか買っていたし、木刀の方がいいかもな。

・・・あれ？

「晴香。今MP減ってる状態だけど、全回復してから錬成した方が強く錬成できるみたい。そうしてもいいかな。」

「いいよ。太陽的にまだ午前中みたいだし、少しゆっくりしようか。」

「あと、ステータス的に晴香の方がMPが100多いし、晴香が錬成してくれ。木刀で最大まで+つけてくれ。」

「了解。でさあ、一昨日学校でミキがさあ。・・・」

俺達が他愛もない話をしていると体感で1時間くらいで晴香のMPは全回復した。

MPは体感1時間で200くらい回復するようだ。これも覚えておこう。

「じゃあ錬成するね。・・・ん？」

「どうした？」

「木刀+20の次に魔木刀って表示になったよ。+は19まであるかな。」

おそらく魔木刀は木刀の上位武器だろう。そっちの方がいいな。

ていうか、やっぱり晴香のMPはすごく多いな。俺の1.5倍とかすごいわ。

「じゃあ、魔木刀+19を錬成してくれ。それでMPがある程度回復したら外に出てみよう。街とか人のいる場所まで行けたらいいんだけどね。」

「わかった。とりあえず作るね。」

ナイフとテーブルが光り輝き、黒くて長めの木刀が現れた。持つところにいくつか六芒星が赤く刻まれていて、柄から見るに鉄芯が入っているようだ。

「なんかかっこいい木刀だね。黒いところは家にあった木刀に近い

よね。」

「・・・かつこいい！！マジかつこいい！！」

「良かったね。私は職業的に持っていなくても平気みたいけど、仁は持っていた方がいいよね。」

そうなのである。

晴香の職業は魔道士、神官、狩人の三つであるが、その三つは総じてレベルが高い。

魔道士と狩人に関してはL100を超える最上位職である。

ちなみに俺のL100以上は剣聖のみ。

ていうか晴香の一番の強みは魔道士、神官というある一点に特化した職業と狩人というバランスも良く素早いという職で、素早く回復系スキルや魔法系スキルを使えるということである。

・・・まあ、あくまでこの世界がストレートストーリーと同じような世界であるとしての推測ではあるが。

要するに、晴香は今のところ強い魔法があるから絶対に武器が必要というわけではないということだ。

逆に俺は武器が必須だ。

魔法剣士と聖拳士のおかげで魔法系スキルと回復系スキルも使えるが、中級レベルのスキルまでしか取れずMAも少ない。

魔法だけで大丈夫とは言えないだろう。

それに俺は職業を5つ持っているがレベルが高いのは剣聖L150のみで、他は平均して低い。

どう考えても剣を使う必要があるだろう。

「とりあえずMPが回復したら外に出てみよう。街とかに行けるよ  
うなら行って、行けないようなら戻ってこよう。」

「そうだね。」

太陽が真上に来た時に晴香のMPは大体回復した。さて、そろそろ外にでるか。

「なにが外で起こるか分からないから、用心していこうな。」

「あと、とりあえず魔法がどの程度使えるか確認しようね。」

「了解。」

目の前に広がる木々を前にして、二人して一緒に息をのんだ。

「よし！行くぞ！」

「うん！」

バキッと小枝を踏みしめて俺達は前に踏み出した。さて、何が待っていることやら。

#### 四話　く喜劇の始まりく

コトン。コトン。

ゆっくりと鳴り響く足音。

一身に黒を纏い、ゆっくりと響き渡るオト。

悲しみのような、怒りのような。大きな虚しさが響き渡る。

いろいろな感情が入り乱れたこの通路で、虚空を見つめたオトコハワラウ。

「愛しているよ。大切だよ。だからこそ、俺は鬼になろう。」

「君がどんな結果を迎えても、これが俺の最後のエゴだよ。」

「結果君が死んでしまっても、俺はもう後悔はしない。」

「わかってくれるだろう。俺はこうしたいんだ。」

狂気なのか、狂喜なのか。

多分自分でもわかってはいないだろう。

でもその姿を見たら皆、こう言うだろう。

「アイツハクルッテシマッタ。」

## 五話　く覚悟と心の慟哭く

「上のほおお、ああるこおお。下ばかりい向いていると転ばない。」

昔流行った「ナベヤキ」っていうを歌いながら、晴香はニコニコと歩いている。

懐かしい歌だな。

何気によくギターで弾きながらよく歌ったな。

・・・ハードロックバージョンで。

それにしても嬉しそうに前を歩いている晴香には驚かされる。

自分でも混乱しているだろうに、場をとつか俺を和ませるためにあえて明るくしているのだろうか。

・・・そうだよな？

「でも、あのヘンテコな塔に向けて歩いているけど、それが正しいのかな？」

「他に明確な目標がないんだからしょうがないだろ。適当に歩くよりはいいし、目印付けてるからさっきの小屋に戻るから、まあ大丈夫だろ。」

そう、俺達の前方には塔がある。

近代的なビルとかではもちろんなく、中世代にあったであろうような煉瓦つぽい塔が見える。

赤茶けたその塔は、森の中にあるのがなんだか場違いなような気がするが、不自然な人工的感覚を惹起させる作りでありながら、不思議と違和感なくそびえ立っている。

頂上は『雲がかかりそう』などという装飾語が付きそうなほど高い

位置にあり、鳥が周りを飛び回っている。

俺達は木々に木刀で跡をつけながら、とりあえず俺達は人工物であるであろうその塔に向かっている。

もしかしたら人がいるかもしれないし。

ていうか、この木刀はマジですごい。

同じ木であるはずなのに木をぶん殴っても折れないし、むしろ巨木と言ってもいいほどの木を砕き、木刀には傷も付かない。

マジすげえ。

この魔木刀+19!!

「でも、ゲームみたいで楽しいね。実は私も仁とストレートストーリーしたかったんだ。なんだか嬉しいな。」

「言えばノーパソ貸したのに。俺も何気に晴香とゲームしてみたかったかも。」

「えー。借りればよかったかなあ。」

「そうかもな。でもストレートストーリーを二人でしていたら、こんな感じだったのかな？なんだかウキウキするね。」

「うん！なんだか嬉しいかも。それにしても木ばかりだね。また誰かに会えたらいい…。キャッっ!!」

なんだ？

なんだなんだなんだ？

なんだあの黒くてでかい狸みたいなやつは。



てかあいつ。

晴香にぶつかったよな。

ぶつかったよなあ！！

晴香。

なにうずくまってるんだよ。

返事しろよ。

おい！！

「・・・晴香？」

てめえ、晴香に何したんだ。

おい。

おいおいおいおい！！

「ぶりやああああ！！！」

俺は木刀を振りかぶった。

ズアアーン！！

ちよつと前に晴香が見せてくれた「ファイヤ」が着弾した時より大きなクレーターが俺の振りかぶった先にできた。

てか、正直そんなことはどうでもいい。

俺の晴香に。

「俺の晴香に何をしたあああ！！！！」

昔地元で、車に轢かれた狸とか、蛇と戦っている狸を見たことがある。

昔見た狸は犬くらいの大きさだったが、こいつは大きめのイノシシ位ありそうだ。

無傷な様子を見るとさっきのは当たらなかったか！

何気にすばしっこいこの狸は、さっきの木刀の一振りをよけていたようだ。

・・・関係ない。

俺の晴香に手え出したんだ。  
ぜってえ潰す。

「ギヤアアアア！！」

「なめんなこらああああ！！」

奇声を上げながら突っ込んできた狸の鼻筋に思いっきり木刀を振りおろし、つんのめって動かなくなったところに狸の腹を蹴り飛ばす。

「えあ？」

狸が吹っ飛んで行った様子を見て、俺は思わず変な声を出してしまった。

木を何本かなぎ倒しながら地面に転がる狸を見て、俺は素直に驚いた。

俺はいろいろな格闘技を習ってはすぐやめてという幼少時代を過ごし、一つの武道を納めたりはしなかったが、喧嘩はそれなりに強かった。

そんなこんなで喧嘩をしたことはそれなりに多かったし、人間相手に蹴りを放ったことはあった。

しかし、人間くらいありそうな体積を持った物体が木々をなぎ倒しながら吹き飛ぶ様を見たのは、当然ながら初めてだ。

「・・・っ。晴香あー!!」

・・・呼吸はしているし、顔色もそんなに悪くない。  
ステータスも確認したけど、HPは7しか減っていない。  
しかし、状態が気絶になっている。  
とりあえず晴香は無事のようだ。

・・・よかった。

本当によかった。

「・・・えつと、回復は・・・。『セイント』。」

晴香を柔らかな光が包み込む。  
膝の擦り傷とかちよつとした怪我が消えていく。  
自分で唱えておきながら、異質な光景だ。

「おい、晴香大丈夫か？おい？」

「ううん。後十分うん。」

「おいしいい!!!起きろし!!!」

思わずつつこんでしまったが、寝ぼけながら幸せそうに寝ている様子からいって、多分平気だろう。

そんなにしないうちに目も覚めるはずだ。

それにしてもさっきの狸はなんなんだ？

いきなり現れて晴香にぶつかってきたけど、冷静に考えるとあんなのが野生でうろつろしているなんて危なすぎだろ。

まあ、これで間違いなくここには危険があるということが確実になつたな。

これから歩くときには周囲を警戒しながら行動する必要があるな。

・・・いや。

とりあえず晴香が起きるまで少しここで休もう。

さっきの狸は少し先でピクリとも動かないし、腕が変な方向いてい  
ることから狸が起きてても大丈夫だろう。

ともかくスキルは現実に使えることがわかったし、これからはそれ  
が生命線になるだろう。

俺が使えるようなスキルで便利そうなのは・・・、魔法剣とかいいか  
もな。

なによりかつこいいし。

さっきの様子から俺の身体能力は、今までよりかなり上がっている  
だろう。

なんていったってあんなでかい動物が蹴っただけで、木々をなぎ倒  
しながら吹っ飛んで行っただけだから。

「魔法剣は・・・。エアロソード。で、できたのか？」

魔法剣はというか、魔法系のスキルは基本としては四種類存在して  
いるみたいで、ファイア系、アイス系、エアロ系、ガイア系が存在  
する。

魔法剣もそれに対応しているようだ。

晴香は闇属性の魔法系スキルを取得していたが、あれは多分最上位  
職である魔道士であるから取得できたのであろう。

ストレートストーリーでもそうだった。

・・・いや、やめよう。

ごまかすのは。

この世界はストレートストーリーに準拠した世界なんだ。  
認めよう。

・・・ここは俺達の世界じゃないんだ。

・・・まあいい。

とりあえず魔法剣の確認をしよう。

「これはすごいな。見えはしないけど剣からシュンシュンと音がするから、多分スキルはかかっているんだろうな。威力はどうかなのと。」

シュン。ズガガガガガガ！

・・・。

異世界すげえ！！

何の手ごたえ無く木刀で木が切れた！！

結構この木太いの！！

「ひゃ！！ど、どうしたの？」

木が倒れる音で晴香は起きたようだ。

まあ、これだけ大きい音で起きない人間はいないか。

「魔法剣試してみたんだ。てか調子はどう？痛いところとかは？」

「大丈夫。でもなんでこんなところで私寝てたの？」

「覚えてないのか？大きな狸みたいなのにつつかられたの？」

「うん？あ！！なにか衝撃があつたかも！！」

「気絶していたんだぞ。晴香。とりあえず回復はしといたけど。」

「ありがとう。んと、大丈夫みたい。それでその狸はどうなったの？」

「あそこだよ。」

俺は狸が倒れている方向を指さした。

狸は未だにピクリともせず、さっきと同じ態勢で倒れていた。

まわりの様子もさっきと変わっておらず何本かの木がなぎ倒されてお  
り、・・・よく見たら結構派手に狸は転がっていたようだ。

「・・・これ仁がやったの？」

「う、うん。俺がやったて言うか、その、蹴ったらこんな感じに。  
なったというか・・・。」

「・・・なんだか異世界って感じになってきたね。この様子だとス  
キルの効果もちゃんと出ているみたいだし。」

「・・・そうだな。とにかく危険があることが間違いなくなった以  
上、用心して行こう。さっきみたいになったら困るからね。」

「そうだね。さっきまで私ちょっと浮かれていたみたいだし、反省  
しなきゃ。」

「それと晴香。多分だけど、狩人のスキルの中に『索敵』ってなか  
ったか？多分あると思うんだけど。」

「あー！あったねえそんなスキル！あれ使えばうまくすれば敵とか  
わかるもんね。」

「そういうこと。じゃあ、使ってみて。」

「うん。『索敵』」

もともと、索敵っていうスキルはエリア内の敵の場所とかを確認するスキルで、ストリートストーリー内ではかなり重宝するスキルだ。狩人系統の二次職で覚え、その後もずっとお世話になる優秀なスキルである。

俺の持つている忍者も上位職の暗殺者になれば覚えるが、忍者はまだL58だからまだまだ覚えることはないだろう。

「近くにあの狸以外の反応はないみたい。ていうかこのスキル便利だね！簡単な地図みたいなのが見えるよ！」

「よかった。索敵の効果はこの世界でも優秀みたいだね。まあ、その地図は晴香にしか見えないみたいだけど。・・・狸まだ反応してるの？」

「しているよ。」

「・・・つよし、倒してみるか。」

「え？倒すって、殺すってことだよ？」

「わかってる。でもこれからのためにも慣れておかなきゃ。何があるか分からないし。」

「う、そっか。・・・頭ではわかってるんだけどね。」

「ああ、晴香は徐々に馴らしていけばいい。でもさ、俺は晴香を守らなくちゃならない。こんなよくわからない世界で生きていくためには、倫理観なんか捨てなきゃダメな気がする。とまどって晴香に

なにかあつたら俺は、自分が許せないし許さない。」

「・・・仁。」

「命は軽いもんじゃない。そんなことは重々わかっている。でもさ、それよりも大切なものがあるなら、俺は容赦しない。」

晴香の言葉を待たずに俺は狸の方に歩きだした。

近くで見たら狸はもう死にかけていた。

俺が蹴り飛ばした部分は裂けていたし、木にぶつかった拍子に枝が刺さっていたのか、体には何本も枝が刺さっていた。

「うっう。」

正直すごくグロい。

生々しい。

もう死にかけているようだが、野生の生命力というか、まだギリギリ生きているようだ。

エアロソードの効果が切れた木刀を、振り上げる。

「ファイアソード、」

木刀に手元の方から火がともる。

次第に刀身は炎に包まれ、チリチリと音を鳴らす。

「お前の命は俺の糧になる。晴香を襲ったのが運の尽きだったな。・・・だから、お前の命を俺にくれ!!」

ジャシュツッ!!

斬った切り口から炎が燃え上がり、次々と炎が肉片を包み込んでい



く。

・・・臭い。

草食だか肉食だか知らないけれど、肉が焦げる匂いって、こんな臭かったけ？

ああ。命って、こんなに簡単に潰えるし、肉の燃える匂いって本当は臭く、こんなにも禁忌すべき香りだったんだ。

・・・きもちわるい。

焦げかすの匂いが消えた頃、晴香が俺を抱きしめていた。

女くさく良いにおいの晴香は、よくわからないが泣いていた。

泣くなよという俺の言葉を無視して、ひたすら晴香は泣いていた。気が付けば俺の顔も、濡れていた。

## 六話　　く街並と派遣会社く

塔が近くに見えてきた頃、俺達は町と言っていい規模の集落に辿り着いた。

大狸（俺命名）に遭遇した後、晴香の指示に従いながら俺達は塔に向かったのだが、索敵の能力はやはりかなり優秀だった。

晴香は何度か俺達以外の生物を見つけたようだが、なんとか迂回して塔に辿りつけた。

正直あの大狸位だったらなんとかできるだろうが、あの周辺に大狸より強い生物とかいたらマジ怖い。

それにあの時はキレてて何にも考えていなかったが、今考えたら命のやり取りはちょっと怖い。

とにかく本当に索敵は優秀だ。

まあ、なんとか人が居そうな集落には着いた。

その集落はさつきから見えていた塔を囲むように街並みが整えられ、良く言っても古き良き、悪く言ったら時代遅れの街並みである。

家には煉瓦も使われておらず土壁であり、人智を尽くしたビルなどを見てきた俺からしたらやけに古くさくて地味な印象を受けた。

塔を囲むようにある集落の周辺をさらに土と石を使った壁で覆われているようで、門番がいる壁がない部分が森と集落の出入り口のようだ。

幸い集落に入るのに金などはいらないようで、俺たちは無事に集落に入ることができた。

「いらっしゃいー!!」

「安くしとくよ。」

商売人のどんな世界でもよくあるありきたりな商売文句を背に受けて、俺と晴香は人波をかき分けてメインストリートらしき通りを歩いている。

風景とは合致しないほどの人数の人がごった返し、生活水準的にみれば明らかに今まで生きてきた世界より低い。

メインストリートとおもわしき道を埋め尽くす人混みは絶えることなくはなく、人口密度どれくらいだよとつっこみたくなるくらいの様子である。

街並みの中の店としては食べ物屋が多く、歩いている多くの人は食べ物が入った包みやクレープのようなものを片手に店を見ながら、思い思い過ごしているようだ。

俺たちは入口から三本に伸びた道の内一番大きな通りに足を進めたが、他の二本の道はまた違った店がきつと広がっているのだろう。とりあえず泊まる所を確保すべきだろう。

腹も減ったし何か買ったついでに聞いてみるか。

「晴香なにか食べたいものあった？朝に果物食べたただだし、そろそろ腹減ったろ。」

「そうだね。さっき会ったケバブみたいなやつがいいな。」

「・・・あ。」

「なに？」

「俺ら金なくね？」

「・・・あ。」

「・・・まずは金を稼ぐ必要があるな。」

「そういえば、あのベンって人が言っていた派遣会社ってあそこかな？」

「ホントだ。看板に派遣会社って書いてあるな。・・・ってか、文字も日本語なんだな。」

「とにかく入ってみようよ。何か良い情報があるかもしれないし。」  
「そうだな。入ってみよう。」

カランカラン。

扉を開けると少し鈍い音の鈴鳴り、俺たちがこの建物に入ったことを知らせる。

正面に窓口が三つ。

上には左から『登録』、『受け付け』、『支払い』と書かれた看板が掛かっていて、窓口のさらに左には大きめの黒板見たいなやつが置いてあり、紙が張られたり文字が書かれていたりしていた。

「ここは初めてか？」

背後からいきなり声をかけられた。

声をかけた人を見てみると筋肉質の背の高い、ちょっとゴツい男性が立っていた。

右胸には案内役というこの人にはあまり似合わない札が付いていた。

「はい。そうです。」

「会員登録はしてあるか？」

「会員登録ですか？していません。」

「そうか。見た感じ冒険者だろう？なら会員登録はしておいたほうがいいぞ。旅をする時の利点が多いからな。」

「利点ですか。どんな利点があるんですか？」

「何も知らないんだな。一番大きいのは身分保障と資源の買取が割高くなったり、道具の販売価格が一割安くなるという売買的優遇だな。まあ、金がないやつから見たら、派遣会社に泊まれることが大きいようだがな。」

「結構利点が大きいですね。登録に何か条件はあるんですか？」

「登録にはないな。登録後に三カ月一度一万円納めればいい。まあ、一万円程度なら何回か簡単な仕事をすればすぐに稼げるから、あまり気にすることもないだろ。」

「そうですか。登録する人は多いですか？」

「多いな。旅をしている人は大体登録しているし、町人も半分くらいの人が登録している。小遣い稼ぎに簡単な仕事とかもできるしな。」

「そうですか。俺とこの子の二人なんですが、登録したいんですが。」

「そうか。じゃあ、一番左の窓口に行ってくれ。」

「わかりました。いろいろありがとうございました。」

「仕事だからな。気にしないでくれ。」

ゴツいのになかなか優しい案内の人から離れて、俺と晴香は教えてもらった一番左の窓口に向かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2472z/>

---

ダブルストーリー

2011年12月19日19時54分発行